

「道徳主義をこえて」(1)

菊田行住

「御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようなようであったか、すぐに忘れてしまいます。しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このような人は、その行いによって幸せになります。」

(ヤコブの手紙 1章22-25節)

キリスト教が日本になかなか広まらず、人口比1パーセントの辺りを、いつまでもうろろろとしていると言われるようになって、ずいぶん長くなりました。その原因として、色々考えられると思いますが、ここでは、キリスト教が持つ厳しい道徳主義的な側面を、日本人が敬遠しているのではないかという点に触れてみたいと思います。

今回取り上げた聖書箇所などを何の説明もなく読まれたとしたら、やはり、キリスト教というのは、信徒に厳しい道徳や倫理的な清さを求める宗教だと思われる方も多いと思います。しかし、後で説明したいと思います、実は、ここでの「行い」を求める要求は、決して厳しい道徳主義といったものとは、意味合いが大きく違うものなのです。それなのに、これは本当に日本のキリスト教にとって不幸なことだったと思うのですが、残念ながら、日本におけるキリスト教のイメージとして、道徳的に厳格さを求める宗教というイメージが、少なからず定着してしまっているのだと思います。そのことを、よく表している例として、井上洋治神父という方の指摘があります。井上神父はカトリックの司祭であり、今回取り上げている道徳主義的な日本のキリスト教の誤りを、ずいぶん早い時期から指摘して来られた方です。井上神父は、赴任していた教会の近くにある銭湯のおかみさんに、このように言葉を投げかけられました。「こうやってみると、日曜日に教会に行かれる方がたくさんいらっしゃいますねえ。それこそ私なんかろくなことをしてないから、とても教会の門の前を歩く資格もありませんけど・・・」(井上洋治『余白の旅』181頁)。ここでの銭湯のおかみさんが持つ、キリスト教への厳格な道徳主義的イメージが、実は、明治期以来の日本のキリスト教の歩んできた歴史を、一言で言い表しているのだと、井上神父は言うわけです。そしてこのことは、私自身も実感を込めて思い当たるところで、信仰者となる前に、そのようなイメージを持っていたことを覚えています。そしてさらに、信仰者となり、牧師になろうという神学生の段階においても、そのことはますます感じる場所となりました。教会に集う信仰者であっても、実は、この厳格な道徳主義的な雰囲気、常に神経をすり減らして、抑圧されているのではないかという感覚が、いつもつきまとって来ました。本来、人を自由にし、心に平安のある、大きな喜びを与えるはずのキリスト教信仰のはずですが、信仰者となってから、逆に重い足かせをはめられ、ているよ

うな、大変不自由な信仰のあり方というものが日本のキリスト教の中でよく見られるのだとしたら、それはやはり、どこかで間違ってしまったのではないかとしか、言いようがないのだと思います。

私が通っていた牧師を養成する神学校である東京神学大学には、歴史神学を教えている棚村重行教授という方がいます。棚村教授は、明治期に日本にキリスト教（プロテスタント）を主に伝えたアメリカ本国のキリスト教信仰と、その後の日本でのキリスト教信仰に影響を与えた関係について、詳細に研究されていました。その研究によると、始めに日本に伝えられたキリスト教は、様々な教派があったのですが、そのどの教派においても、一つの特徴的な信仰の方向性を、所々に見ることが出来るということがありました。その特徴として、簡単にいってみれば、人間の努力や行いを大変強調するといったものでした（棚村重行『二つの福音は波濤を越えて』に詳しく叙述されています）。今では、正統的信仰としては、神からの救いといったものは、神からの恵みによってのみもたらされると答えるのが正しいとされるのですが、当時において、アメリカ経由でもたらされたキリスト教においては、救いには人間の「行い」も、神の恵みに付け加えて必要だとする考え方が、かなり体勢を占めていたとのことでありました。このような要因として、アメリカでのキリスト教が置かれていた当時の時代背景が大きく影響しているわけですが、そこには触れず、ここではともかく、日本に伝えられたキリスト教が、始めから、道德主義的な傾向を強く持ったものであったということを確認しておきたいと思います。その傾向は、これまでの日本のキリスト教の歴史において、様々に修正を試みる取り組みにも関わらず、根強く日本のキリスト教を深いところで規定してきていると考えられます。「すりこみ」という鳥類などの学習様式があります。例えばカルガモの雛は、最初に見たものを親だと認識するというものですが、まさに、日本のキリスト教には、その始めに、道德主義的な性質がすりこまれ、それが本来のキリスト教そのもののあり方だと、意識しているかいないかにかかわらず、根深いところで定着してしまっているのだということが言えるでしょう。

そしてまた、日本に伝えられたキリスト教には、プロテスタント以外で特に大きな勢力として、井上神父も所属しているカトリックがあります。そのカトリックによって伝えられたキリスト教も、実は、当初から厳格な道德主義的な傾向が強いものでありました。私が聞いたところによりますと、明治期に日本に伝えられたカトリックは、主にフランスからであり、フランスでは、フランス革命を経験したことにより、その反動として当時の教会が、大変保守化して、倫理や道德に厳格さを求めたものになっていたということでした。

つまり、日本に伝えられた二大キリスト教の勢力であるプロテスタントもカトリックも、どちらも厳格な道德主義的な性質の強いキリスト教であったということが言えるわけです。そのような道德的に厳格さを求めるキリスト教において、今回の聖書箇所を読んでしまえば、当然、一般の人はキリスト教に大きな距離を感じることになり、そして信仰者においても、大変な緊張を伴う、息の詰まる教会生活になってしまうのも無理はないのだということですね。

やはり、キリスト教の歴史を丁寧にたどって行き、整理しながら、聖書が本来伝えようとしている信仰のあるべき姿を、求めて行くことが必要になって来るのだと思います。次回以降で、そのことを見て行きたいと思います。（次回に続く）

